

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 CIFTCI Ummuhan

論文題目

現代日本語における形容詞的動詞をめぐって
一連体修飾の「ル」「テイル」「タ」形を中心に一

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	釘貫亨
委員	名古屋大学教授	佐久間淳一
委員	名古屋大学准教授	宮地朝子

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、現代日本語において動詞の形を変えことなく事実上形容詞の働きをなす一連の統語的現象を観察対象にして、その独自の機能を多様な角度から記述を試みた研究である。「切れる包丁」「空いている席」「変わった人」などの表現に現れるこの種の用法を論者は、寺村（1984）に倣って「形容詞的動詞」と規定して、多角的な視点からの観察と分析を試みている。論者は、形容詞的動詞を①和語動詞由来のもの、②漢語動詞由来のもの、③複合動詞由来のもの、に三分類し、動詞の語彙的意味とりわけ自動詞と他動詞との関係を解明している。論者が使用するコーパスは朝日新聞オンライン記事データベース（1984～2014）である。

第一章、第二章では、和語における自動詞能動形（破れているシャツ・尖った鉛筆等）および他動詞受動形（置かれた状況・閉ざされた空間等）に「ル」「テイル」「タ」がそれぞれ接する形態を比較して記述する。その結果、論者は被修飾名詞がヒトの場合、形容詞的用法に動員される自動詞が増加し、一定の制限が存在するとする。

第三章では、「安定した椅子」のような漢語サ変動詞由来の形容詞的用法の実態を観察する。論者によれば、従来の研究は、和語中心で漢語サ変動詞の形容詞的用法の研究は事実上行われていないとする。その結果、他の和語動詞の形容詞的用法に観察される「タ」形の鮮明な関与が漢語系動詞においても観察されたとした。

第四章と第五章では、「切りたつ山」「落ち込んでいる人」（以上自動詞）、「忘れられた手紙」「鍛え上げられた体」（以上他動詞）のような複合動詞由来の形容詞的用法が観察される。論者は、「タ」形に突出する当該用法への関与が「長引く不況」のような「ル」形が有力に関与する形態が発達していることを記述している。特に他動詞資源の用法において「切り開かれた山」のように「ラレタ」介入形が優勢に関与することと比べて「テイル」介入形が文脈から離脱できず、アスペクトの影響から抜け出ることが困難な実態が報告されている。

第六章では、「変わらない景色」「消えない疑問」のような否定形が介入する形容詞的用法が観察分析される。その際、論者は、「ーナイ」形（売れない車、さえない顔等）と「ーテイナイ」形（消えていないプライド、片付いていない実家等）を比較して、「まだ」「今も」「未だ」等の時を表示する副詞との共起関係をもとに形容詞的用法への移行の有無を判定する方法を採用している。

終章では研究の結論と課題が述べられる。論者は、動詞が形容詞的用法に動員されるためには、自動詞は能動形、他動詞は受動形とセットされることによってそれが実現することを実証できたとしたうえで、これらの動詞群は、動作動詞というよりは、状態性を帯びる主体変化動詞、状態変化動詞、静態動詞、瞬間動作動詞などが形容詞的用法に用いられやすいとする。最後に論者の母語であるトルコ語にも同様の動詞的形容詞用法が存在するとして今後の研究方向を展望する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、「生きる屍」「生きている証」「生きた化石」等の、動詞でありながら形容詞と同じ働きをする形容詞的動詞の現代日本語における用法を観察分析した研究である。日本語におけるこの種の用法は、印欧語において分詞 *participle* と呼ばれてきたものである。この存在が従来から認識されながら研究が進展しなかった中で、論者はこれに関与するすべての文脈、形態を網羅分析した優れた試みを実行した。動詞の形容詞的用法の研究が日本語研究において進展しなかった理由は、この用法が印欧語に典型的なものであるという先入観から離脱できなかったためである。論者はこれに果敢に切り込んだ。論者は、等閑に付されてきた当該用法の研究に着手する際において、文芸作品や口語資料のような比較的自由的な形式が出現しやすいテキストに取材することを避けて、表現に制限の多い新聞コーパスを採用した。この点、論者の方法の妥当性の高さを示すものであろう。

本研究に一貫する論者の主張の軸は、次の点に存すると考えられる。すなわち当該用法に関与する動詞の自動詞・他動詞の区別および他動詞を自動詞化する受け身助辞「レル・ラレル」と動作の結果を恒常的状态として表示する過去辞「タ」の介入である。如上の事実について、従来直観的に把握されていたものであるが、論者によって現代語の文献資料を用いて論証された。この点に論者の研究の成果が評価される。

論者によればタ形がテイル形に比べて形容詞的用法に関与する度合いが高いということであるが、これは言い換えればテイル形が文脈により強くとどまってタ形よりアスペクト構造から離脱しにくい性質を持つためである。この事実を論証するために、「いまだ」「今も」のような時を表示する副詞と共起するかどうかを手掛かりにテストを行ったことは独創的な方法として評価できる。論者の観察は、現代語に現れうる動詞の形容詞的用法のすべての環境に及んでいる点であり、とりわけ漢語サ変動詞由来の用法は、従来全く研究の手が及ばなかった領域であり、極めて高い評価に値する。

日本語の分詞用法は、印欧語のそれが現在と過去の二形態をもとに展開されるのに比べて基本形・現在形・過去形・受身形・打消し形とむしろ多様に発達している。論者の研究は、将来の当該分野の研究の発展を展望している。一方、論者は「取り皿」「割れ物」のような連用形名詞修飾を形容詞的用法と区別せず論じているが(第一章)、連用形名詞修飾は、形容詞的用法ではなく印欧語の動名詞に相当する用法であり、区別して論ずるべきであった。また日本語非母語話者であるが故の用例解釈の事実誤認が少数ながら見受けられることも惜しまれる。しかしこれらの瑕疵はいずれも部分的で十分回復可能なものであり、本質的なものではない。論者は、母語トルコ語の分詞用法に関心を寄せながらこれを禁欲的に抑制して現代日本語の観察に没頭して、有益な成果を得た。以上のことから、審査委員一同一致して、本研究が博士(文学)の学位にふさわしい業績であると判断した。